

双月刊行有料宅配誌／編集兼発行人・中村公彦

蒼蒼

第96号

2000年12月10日 発行
宅配料2年12号1000円
(小額郵便切手可)

株式会社蒼蒼社／東京都町田市森野2-26-16

台湾の老板と大陸の老板

『醜い中国人』を読んで

山中伸生

(日立メディアエレクトロニクス統括本部)

『醜い中国人』(武俊平著、寛武雄訳、蒼蒼社刊)を一読して、「沸騰するやかんの湯」すなわち中国老板といった印象でした。

現代中国社内部からの詳細な報告で、ミクロ的な分析内容であるだけに、現代中国国内で起こっている諸問題の一端がよく理

解できました。日本の明治初期、戦後の焼け跡においても、多少とも似たような現象は、わが国にもあったものと想像しております。

全く失敗に終わった二十世紀最大の実験(コルジンスキーの言)であった「共產主義」から、市場経済への方針転換で、社会・経済制度の整備も国民の経済思想・行動も訓練されておらず、いまだ「知識・技術・資金」のない人たちに出来ることといえば、社会規範・道徳・法律に抵触するギリギリの線での金儲けが最も取り付きやすく、「老板」に至ることが出来る道なのかもしれません。

中国の現状と将来を展望するときに、一番参考になる雛型として、同じ中国系である台湾のケースを参考に考えてみる事ができるのではないのでしょうか。もちろん、日本統治時代の膨大な遺産があり、人口、国のサイズ等がまったく異なってはいませんが、一党独裁で民族資本、技術、知識人が希薄(日本教育を受けた有識者を進駐した国民党は三万人近く抹殺した)など共通す

ることは多いと思われれます。

詳細は尽くせませんが、以下、私の考えの要点だけを二点コメントしてみたいと思います。

一、台湾三十年の発展とその要因

戦前の台湾では、日本の歴代総督が莫大な国家予算を投じて鉄道、灌漑、上下水道を整備し、何よりも台湾社会に徹底した法治国家の範を示しました。「植民地こそ(被支配者に対して)良いところを見せよう」と新興国は頑張って、「いかに典型的に模範的な制度を敷くものか」と司馬遼太郎をして言わしめています。

一九四九年の蒋介石一派の台湾移転は、盗賊の集団の如き振る舞いで、社会の表面から法治国家の美風を排除してしまいました。しかし、日本時代のインフラ(ハードを含め)日本教育時代に育まれた台湾人の遵法精神や日本時代、日本精神への憧憬などのソフト)は残り、台湾社会は一九六七年頃より世界で初めて輸出加工区をまず高雄

に開設しました。当時、技術・資本・市場を持たない台湾が唯一できたことは、特別地域内に限つての優遇策（法人税免除、外貨枠割りあて、輸入関税免除、コンテナ・ヤードの整備提供）と低廉で豊富な未熟練労働者の提供でした。

他方、日本では、集団就職に代表される「金の卵」の時代を迎え、急激な高度経済成長と人手不足を背景に付加価値の低い産業から海外への進出が始まりました。欧米の委託加工工場を脱皮し、世界に飛躍し始めた日本企業は、台湾を基地として世界中に、主にアメリカに向けて輸出を展開していきましました。中には、日本からの輸出ではアメリカでダンピングに抵触するために、台湾を迂回輸出基地とするものもありました。また、仕向け先国（米国、カナダ等）によっては特惠関税の恩恵を享受することも可能でした。

ほとんど工業関連の技術、生産企業が生まれ出していない環境にあつて、台湾進出企業は素材・部品・設備を全て日本から持ち込み、低廉な現地労働力を使役してアセン

ブリのみをするという具合でした。しかし、時間とともに、コスト、工程管理（納期短縮）のために部品メーカーを招請し、日本資本、技術で部品が現地調達できるような体制を整えていきました。またあわせて、日本企業は技術・所要資金を助案して、台湾人の企業を指導しました。

進出した日本企業の中で、日本語が出来る四十歳以上の台湾人たちは、中堅の幹部として管理の要諦を指導されました。若い一般のワーカー達もハングリーな環境にあり、進んで残業をし、急速に仕事を身に付けていきました（ただし、中国人特有のマーマーフィーがあり、日常はこれとの戦いでしたが）、全く経験のない台湾人（外省人ではない）は、わずかな資金で部品の小規模生産から出発し、日本企業から材料の知識、使用する機械の知識、品質管理の知識などを吸収していきました。日本のメーカーと取引できていることが台湾企業の信用にもなり、彼らは徐々にみずから供給者としての規模とレベルを拡大し、複数の顧客に供給できるまでに成長していきま

した。

台湾はこの時期から年間五千人近い留学生を主にアメリカに送り出していましたが、留学生は卒業しても台湾に帰ることはありませんでした。彼らの最新の知識では、台湾では就職の機会がなかったし、アメリカは魅力に溢れた土地だったので（当時の台湾は戒厳令下にある、自由のない社会でした）。

日本国内の賃金高騰のために、台湾の加工区への進出企業が増えるにつれて、現地の「目端の利く」「小金」を持った人達が日本企業との取引でビジネスを覚え、成功するものが出てきました。もちろん、台湾は政府の方針もあり、国家を脅かす大企業主義をとらなかつたので、もっぱら個人・家族経営の「老板」経営が主体でした。日本統治時代の教育と日本への憧憬は、日本人と台湾人との間に友好的ムードを醸成したことはよく言われることです。

台湾に進出してきた日本企業に部品を供給することで工業技術、部品知識、ビジネスを覚えた時期が、台湾の経済成長の第一

期といえるでしょう。そうして、二十年が経過した頃から、台湾政府は日本一辺倒の依存型から、独自に先進的なハイテク産業を興すべく工業園区を設置し、特典を与え、国内産業の本格的な育成を開始しました。第一期の初期的な訓練を積んで技術・知識・経営と資本蓄積を身に付けた台湾人の中から独自に起業するものが現れてきたのです。この起業を支えたのは、主にアメリカに留学し、そこに残留してビジネスを経験したエリート集団たちです。半導体、パソコンの先端企業で中核をなしていた彼らが、台湾の老木の招請で帰国する、或いは自ら祖国で起業をするようになったのです。彼らはアメリカの中に濃厚な最先端の情報網、友人ネットワークを構築していましたが、これこそ今日の台湾がパソコン周辺機器で大成した理由のひとつです。

こうして工業園として成功する過程で、台湾は戒厳令を解除し、一党独裁を撤廃し、多数党による民主主義を実現させ、その総仕上げとして總統の民選を果たしたのです。大陸と同じ中国人による資本主義、民主主

義の成功事例がすぐお隣に存在しているのです。大陸中国では、八〇年代から開発区をつくっており、今年には新たに輸出加工区を設置しましたが、これらは全く台湾の二番煎じのように思えるのです。

2、戦後日本経済の成功と

中国の将来が抱える問題点

日本は江戸時代の高度に発展した経済、手工業をベースに封建社会から資本主義社会へと転換しました。江戸時代には米の先物取引、為替（江戸 大阪間）制度が成立するなど、江戸商人は十分に米、海産物を動かす等の商業経験を積んでいました。当時、和算による微積分も考案されていたといわれますが、読み書きそろばんの寺小屋も全国各地に十分普及していました。

鈴木正三は「日本資本主義の精神」とも言われる「与えられた天職を通じて仏の道に至る」道理をすでに説いていました。日本の職人気質、すなわち自分の職に打ち込むことを目的とする「気質」「体質」は、今

でも日本人最大の特質ではないでしょうか。与えられた職業に打ち込むことによって仏の道に至ると説いた武士あがりの鈴木正三の面目が、一世紀以上経た現代日本でも躍如しています。これをマックス・ウェバーのプロテスタンチズムと対比する人もいますが、こうした日本人は巷間にいくらでもいて、「平均的な日本人像」となっている

武俊平著／算武雄訳

醜い中国商人

A5判三二〇頁定価二六〇〇円＋税

本書は「身内の恥」を取って家の外に曝け出したものである。街頭の屋台のオヤジ、チンピラのボスから大企業集団の総裁まで、中国語で「老板」（ラオバン）と呼ばれる種族の「醜い商人」ぶりを、鋭くえぐり出すように描いている。日本人は、これを読んで中国の官僚、経営者、ビジネスマン、庶民の「商人文化」の考え方や行動原理に改めて驚嘆せずにはおれないであろう。本書は、中国ミクロ経済の生きた見本であり、中国人を理解する絶好の入門書でもある。

言っていいでしょう。

フランス・フクヤマによると、日本社会には中間社会に「信 (Trust)」があり、企業組織が大きく成長する要素があると言います。他方、中国には中間社会に「信」がなく、企業が個人・家族の域を出ず、大きく発展しないと云います。その社会的背景理由は、フクヤマの著書『信なくば立たず』に説明を譲ることにしましょう。

『醜い中国人』の著者武俊平氏によれば、現代中国の老板企業は一樣に個人企業の域を出ず、資本の蓄積がなく、将来の発展もないそうです。「俄か成り金」は、お金が身につかないという道理もあらうと思いますが、やはり「質的な転換」を遂げるための知識、見識がこれらの老板族の身についていないことが最大の原因ではなからうかと思えます。フクヤマ式に言えば、社会に「信」がなく、そのために企業を個人の能力以上には大きく出来ないという環境もありましよう。

中国大陸社会では資本主義的な発想を三十年間にわたって叩き壊されたあとの対

外開放ですから、人民の発想、考え方も市場経済のシステム原理も、まだまだ理解はできていないだろうと思われれます。また、周囲を見ても範とするものがないのが現実であらうと思えます。

したがって、いまの中国大陸社会では社会のために貢献し、利益を戴くなどという考えは、想像もつかないことで、力があり、目先の効くものが方法を選ばず金を儲けるということになるでしょう。対外開放政策以前は集団のなかで働くことしかなかったが、今は個人で好きなことをして儲けることができるのだ、というように理解されているのではないのでしょうか。

台湾で知った台湾人の個人企業にも当初、この傾向がなしとはしませんが、基本的には「物造り」、「製造業」を厭わない人達です。台湾においては日本統治時代の「公」に対する憧憬をもつて、いまだに社会生活規範とし、経済社会における「公」を強調する台湾経営者が多数います。李登輝前総統は社会におけるボランティアの重要性を強調しています。李氏は、民主主義が

行き着くところは個人主義となり、これはややもすると利己主義となりやすいことを鋭く喝破し、これを修復するものとしてボランティアの出現（台中地震の際）を喜んだのでしょう。

中国人は現実的だ、と言います。彼らの死後観を調べたり聞いたりすると、「あの世はこの世の延長で、この世であったことはあの世でもある」と言います。したがって、社長になつて妾を持つていれば、あの世でも持てることとなります。これでは、何を置いても、この世で頑張らねばなりません。あの世では、生活のためのお金も必要で、子孫は「陰銭」（あの世のお金）を燃やして、故人に送金しているのです。

日本人の死後観は全く異なります。経済的な成功よりも、心の高みが問題とされまます。あの世は、この世とは切り離され、心豊かに現世を過ごせたものは、お金の要らない蓮の台にいけると言われます。あの世のことは、この世の貧富とは関係ないことなのです。

中国人老板は、一時は金を儲けて享楽に

耽りながらも、やがては恒産の何たるかを学んでいくのではないでしょうが、「醜い」ことをするのは、従来の共産主義社会で全ての個人の才覚を消失せしめられた反動ではないでしょうか。社会主義市場経済になったからといって、すぐに国民レベルで市場主義に適合した思想、ビヘイビアが身につくわけがありません。外資との接触を通じての学習、あるいは台湾のように留学生の帰国などに支えられながら時間を掛けなければならないでしょう。それまでは、『醜い中国商人』にあるような老板が出ては消えて、そのうちのほんの一部が流れの中に生き残るでしょう。

中国共産党政府は、市場経済に対する発想が国民のなかに全く出来ていないことを念頭において、戦後の台湾政府が進めたこととく、着実に経済成長政策を進めていかなければならないでしょう。競争の中にも機会の均等、フェアな競争が出来るように制度を整えねばなりません。その際の貴重な教師陣は、海外の経験を積んだ外資であるということとを彼ら自身が肝に銘じることが

必要でしょう。外資の信頼を裏切るような政策を繰り返しては、中国の発展は覚束ないでしょう。

資本主義、市場経済の何たるかを中国国民が外資との接点等で身につけていけば、中国は市場経済で成功できるのではないのでしょうか。そのときには、台湾と同じように、国家も一党独裁で競争のないシステムではいられず、市場経済にふさわしい、多数政党の民主主義形態を採用することになるのではないのでしょうか。台湾の民主化は当初は徐々に進められ、あるときから雪崩をうったように急速に進みましたが、大陸中国も、その日がそれほど遠くないのでは、とも思えます。中国の時間感覚は、日本の時間感覚と違うにしてもです。

台湾 中国とこれからのような発展、関係を構築していけるか、興味の尽きないテーマで、これからも感情的に一方に組することなく見守っていきたいと思います。が、今のところ国土も政治力も小さな台湾の存在が、私の心の秤の上では重いのはなぜでしょうか。

『醜い中国商人』の著者から訳者へのメール

【寛武雄解題】『醜い中国商人』邦訳作業の過程で、私は中国在住の原著者・武俊平氏（内蒙古自治区フホト市在住）と幾度となくEメールで意見を交換した。原書の割愛部分などについて武氏は私に殆ど「全権委任」してくれたが、その条件は私の書いた解説文を中国語に翻訳して彼に読んでもらうというものだった。全訳草稿ができたら十月に、私は自分の解説文要約を中国語に訳して、約束どおり彼に送った。その翌日、彼から受け取った返事をここに紹介しよう。

拝啓 寛武雄様 こんなに早くEメールで連絡ができるとは、まさにおっしゃるとおり現代科学技術進歩の奇跡ですね！

貴殿の書かれた「訳者はしがき」と「解説」の文章を拝見しました。あらためて貴殿が中国語と中国の文化に精通しておられ

ることに驚くとともに、貴殿の現代世界経済、なかでも中国経済に対して持つられる洞察力に敬意を表します。ひとつの民族意識、国家意識を超越した、一種の世界的な観点から、客観的かつ冷静に問題を解説しておられる点は、まさに現代知識人の持つべき卓越した見識を体現していると思います。

おっしゃるとおり、中国経済と中国企業経営者に対する見方において、私たちには多くの共通点があります。

私は、現代の中国企業経営者たちが持つ多くの欠点は、彼らを持つて生まれた天性のものではなく、彼らがおかれてきた経済体制、文化、地理、歴史的な環境など多くの要素があわさって生まれ出たものだと考えています。中でも、経済体制はひとつのキーポイントでしょう。ですから、現代中国の企業経営者たちの素質向上のためには、まずフェアな市場競争を実現し得る社会環境の出現を待たねばなりませんし、民主的な政治と民主的な経済の成熟も必要です。他方、彼ら自身には何も責任が無いかと

いうと、決してそうではありません。しかし、おそらく彼らの中には、しっかりとした展望と見識をもった人物がすでに着々と準備をすすめていて、いずれ彼ら自身の力で彼ら自身の問題点を克服していくのだろ

前が死ぬか」というような悪質な競争であつてはなりません。われわれ現代社会に生きる人類は、国境を越えて、相互依存をますます強めているのです。このような観点から見れば、同じ漢字文化圏に属している中国と日本の両国のビジネスマンは、相互の利益と一層の相互発展のために、さらによくお互いを知り、もっとコミュニケーションを深める必要があります。

いうものは外部からの圧力により無理に形成されるものではなく、もともとは彼ら商人が市場の中で生き延び、発展していくために必須の客観的な道理であるからです。現代世界の経済社会発展の勢いからみれば、世界の市場は益々結びつきを強め、巨大なグローバル市場が出現していくものと思われま

まさに貴殿の主張しておられるとおり、現代中国の経済体制、伝統的な社会文化の中に存在する「発展を阻害する諸因子」は改革していかねばならないと中国国内にいる数多くの民間企業経営者たち、知識人たちは強く感じています。この事実こそが現代中国の希望であると私も思います。同時に、緩慢ではあつても、中国社会は必ず変えられるものだ、中国経済体制はより良く変革できるものだ、と私は確信しております。

貴殿の解説はまさに「画竜点睛」の筆でありました。

二〇〇〇年十月六日 武 俊平

中国的なるものを考える環

さかしまの世界

福本勝清（明治大学教授）

祭に神輿はつきものだが、神輿は担ぎ手（氏子）と担がれるもの（御神体）からなる。そしてさらに、拍子木を鳴らしたり、まといを振り回して神輿の列を統率する先導役が加わる。この神輿を囃したり煽ったりする先導役が重要なのだ。前回は突然吉本国家論に触れたところで終わったが、今回もまたそこに戻ると、卑弥呼と男弟の王権論からいえば、卑弥呼は担がれるものであり、担ぎ手はもちろん民衆もしくは王権の担い手である豪族、そして囃し手が男弟である。日本の政治組織（社会組織も含めて）において、表の指導者は（たとえすべての権力が彼に集中する筈になっただけ）象徴的

な権力のみを所有し、本来はそれに次ぐ第二位、第三位のものが実質的な権力を持つことが多いが、これと、第一位のものに象徴的にも実質的にも権力が集中し、第二位、第三位のものも、十位以下のものも、ひとしく第一位のものへの忠誠競争に励まざるをえない伝統中国の政治組織とは、際立った相違がある。日本では選挙があるたびに、有権者に土下座してまで、投票を依頼する立候補者の選挙運動ぶりが報じられるが、日本の指導者の権力が危うい均衡のうえに乗っかっていることを示している。ここでは指導者は、担がれなければ只の人にすぎない。担がれたり、囃されりするのが指導者であるとすれば、指導者にはどこか滑稽さがつきまとう。

次にシャーマニズムについてだが、シャーマニズムとは、神々との直接的なコミュニケーションであり、神の依りまは、それまでどんな身分や地位のものであれ、神が憑依した瞬間から、神の代理として周囲のものを圧倒することになる。また新たな神の登場は、既存の神々の体系に風

穴をあけることもある。筆者の両親が熱心な天理教徒であったせいで、子どもの頃からシャーマニズムに何となく興味があり、その社会的機能に注目するようになった。だから、シャーマニズム「迷信などと言われると、正直むっ」としてしまふ。多分、シャーマニズムに対する評価は、中国と日本知識人ではまったく異なるだろう。孔子の徒であれマルクス主義者であれ、中国人の知識分子にとってシャーマニズムは無知な民衆の迷信でしかないのに対し、我々はたとえ左翼、時代錯誤的な物言いだがか、的の心情の持ち主であれ、柳田国男や宮本常一の熱心な読者として、あるいは彼らの思想に共感するものとして、シャーマニズムを単なる迷信として片づけるわけにはいかない。

一九三〇年代、中国ではようやく農村での社会調査が始まり、その報告が次々出版されたほか、『東方雑誌』、『新中華』、『中国農村』といった雑誌においても、農村の実情報告（ルポルターージュ）が掲載されている。それらを読みながら、気になったの

は、信仰や年中行事が迷信として一括されていることが多いということである。我々ならば当然、民間信仰として分類すべきこととがらである。民間信仰は迷信だということな知識分子特有の思い上りを感じざるをえない。

トリックスターとは、社会の秩序をかき乱すいたずらものであり、その逸脱を通じて文化を活性化させる存在でもある。中国におけるトリックスターをあげよといわれると、ちよつと思ひ浮かばない。八〇年代、日本のアニメ「一休さん」が中国で放映されたことがあった。また、少数民族の故事としてエベンディ（阿凡提）もけっこう知られており、機智や頓智で権力者をやりこめるトリックスターが民衆につける市場（へんな言い回しだが）はあるのだろう。だが、かんじんの中国産がない。マキシ・ホン・キングストン『アメリカの中国人』に、広東語圏のトリックスター陳夢吉といった一節があったので、まったくないとは言えないのかもしれない。

道化もまたトリックスターであるが、中

国の道化については魯迅の「二丑」についての雑文のほか読んでいないので、なんとも言えないが、やはりひどく手薄であるようにみえる。中国で暮らす友人に山口昌男の著作をみな貸してしまったため、また『道化と笏杖』（ウィリアム・ウイルフオード）や『道化』（イーニッド・ウェルズフォード）が手元にないので、やや自信がないのだが、西洋中世における王権のあり方と道化の存在が深く関わっていたことが書かれていたように思う。つまり、王権はそれ自身において自らを笑うものを内蔵していたことになる。

中国人のユーモアについて、よく毛沢東が引き合いに出されるが、実はあのユーモアぶりは皇帝の雅量の範囲のなかの出来事である。それゆえそのユーモアとは、権力を持つ者が持たないものに対して、自由に動き回れるものが身動きのとれないものに対して、そのような傾きの中でしか放たれないものと観念しておいたほうがよい。とつびな思いつきだが、中国の法もまた官（為政者）が民を律するためのものであつて

も、けつしてその逆でないことが言われるが、ユーモアも法もその傾きにおいては同じである。

中国において青春期の放縦が欠けていることは、孫隆基『中国文化の深層結構』に詳しい。青春期とは中ぶらりんの時期（モラトリアム）であり、若者たちは青春期の放縦を通じて自己のアイデンティティ確立を果たすとすれば、その不在は老成した若者と子どもじみた大人の両方を生むことになる。フロイト理論では青春期は「親殺し」の季節である。ヨーロッパが「親殺し」の文化であるとすれば、中国は「子殺し」の文化だと孫隆基はいう。このような青春期の放縦は社会的には年齢階梯制に支えられているように思える。伝統中国に年齢階梯制が存在しないことと青春期の放縦が欠けていることの間には大きな関わりがあるだろう。もつとも地域的には、たとえば漢・越・クリオールや漢・タイ・クリオールから出発したようにみえる華南文化のなかに、近代以後もしばらくは年齢階梯制の痕跡が残っていたように思われる。人類学や民俗学に

おいて注目を集めている結婚しない女たち（自梳女）や娘宿ともいうべき姑婆屋などは、その痕跡として考えられないだろうか。

巡礼については、五岳や四大名山への巡礼がよく知られているので、とりたてて言う必要がないようにみえる。だが、やはり緊要なのは、巡礼においては、特に聖地巡礼においては貴賤の差異が消滅するということである。王侯貴族であれ、下僕や農奴であれ、ひとたび巡礼に身を投じれば、そこでは同じ巡礼として遇される。巡礼が生き直しの機会であるとすれば、その一半はそこに生じる。

日本の遍路がどの程度まで、貴賤の差異の消滅を実践していたのかについて、あまり記憶がないのだが、幕末の「おかげ参り」などを見ると、その参加者の雑然とした性格、そしてそれらが混合することによって生じる開放的な雰囲気は否定できないように思える。もちろん、巡礼が開放的であるのは、参加者が一時的にせよ窮屈な村落共同体から離脱したことによる。我々にとり旅や放浪は、アイデンティティ確立や回復

の機会なのだ。

「中国人にとって当てのない旅はない」と、誰かが言っていたのを思い出す。日本人の旅や「さすらう」ことに對する特別の思い入れを理解することは、日本の共同体を理解することにつながるはずである。もっとも共同体が日本文化の基底であることを知らない人々にとっては無意味な問いかもしれないが。

話は大きく跳ぶが、鶴見良行『マングロープの沼地で』、『海道の社会史』は、フィリピンからインドネシアにかけての島嶼群の社会誌としてとても読み応えのある著作だが、サラワク（ボルネオ）のイバン族についての記述が特に興味深い。元の首狩り族として知られたイバン族はまた、ロングハウス（長屋）の住人としても知られる。ロングハウスの住人になることは、血の繋がりはあまり関係がない。イバンの男たちは生まれながらの戦士であり、若者たちは農閑期ともなれば旅、武者修業に出かける。実はイバンとは旅を意味する。ベトナム戦争の頃、多くのイバンの男たちが南ベ

トナム軍に参加したが、それはイデオロギーとは関係がなく、あくまでも自らの武勇を試すためであった。残された女たちは、男たちが不在にもかかわらず子育てに励む。出生率が低いのにイバンが増えたのは、女たちが子ども好きで、よく小さな子どもをもらったり、買ったりして育て、そしてイバンのもとで育てば、マレイイ人の子どもでも華人の子どもでも、みなイバンの子どもとして育ったためであった。

スマトラのミナンカバウ族は五百万から六百万を擁する大族であり、母系社会の民として知られる。そのためであろうか男たちはよく旅にでかける。彼らの旅、放浪をムランタウと呼ぶ。鶴見良行はフィールドワークに立ち寄ったある南の島で、一人の華人に会い、いろいろ世話をやいてもらっ。どうして、と尋ねた鶴見に、その男は、俺もお前もムランタウの途中だから、と答えただのだという。先ほどのコンテキストと矛盾するようにみえるが、そのような華人に遇えた鶴見が羨ましい、これが今回の話の落ちである。（続く）

周恩来記念館 から周鄧記念館へ

三浦 徹明
(拓殖大学教授)

北京大学の王曉秋教授に引受人になってもらい、一三年振りに中国へ行くこととなった。たまたま『蒼蒼』(九四号、二〇〇〇年八月一〇日発行)を見ていたところ、矢吹晋氏(横浜市立大学教授)が八月にシンポジウム出席のために北京へ行くということを知り、早速に彼に電話をして、「小生も、八月一八日から九月一五日まで、北京へ行くことになって居る」と伝えておいたので、小生よりも数日先に北京へ行っていた矢吹氏や、数力月前から北京師範大学に居った村田忠禧氏(横浜国立大学教授)ともども久し振りに再会でき、また村田氏を通じて北京大学の周季華教授や山西大学の馮良珍教授などにもお会いすることができ、彼らにもお世話になることによっ

て、有意義な時間を楽しく過ごせたのであった。

ところで、小生が天津の南開大学や周恩来記念館などへも行く積もりであるということを矢吹氏に話したところ、「それならば、この『周恩来』一九歳の東京日記』(鈴木博訳、矢吹晋解説、小学館発行)を周恩来記念館に寄贈して来てもらえないか」と頼まれてしまったのである。その後、小生は体調を若干くずしてしまったこともあり、天津行きは徳劫になってしまったものの、メッセンジャー・ボーイを引き受けてしまったからには、何かなんでも周恩来記念館へ行かざるを得なくなってしまうたのである。

そこで、南開大学の白鋼氏(生命科学学院副教授)に電話をして、「あなたの都合の良い日に何時でも良いから天津へ行きたいのだが……」とお願ひして、天津賓館への宿泊を予約してもらったのであった。かくして、九月九日に北京から高速バス(二一〇元)で天津へ向かったのであるが、日本だったら完全にポンコツ車として廃車になってしまっているようなオンボロバス(ドアは閉まらずに紐で縛っているし、ス

ピードも出ない)での三時間余りにわたる単調な風景のところを旅することとなってしまった(帰りの九月一二日には、北京までノンストップの座席指定急行電車にしたが二〇元で一時間二〇分)。しかし、西安から息子の南開大学(化学系)入学式(九月一日)のために来たという人たちとの会話や筆談は楽しかった。

翌九月一〇日、午前中は白鋼氏の案内で古文化街(和平区)へ行って見学しつつ買物をし、近くの食品街を散歩した後に昼食をとった。そして午後、南開公園の東どなりにある「周恩来記念館」(南開区)へ行くことにした。しかし、白鋼氏も南開大学へ赴任したばかりであるから行ったことがないと言うので、私の持参した『天津生活地図冊』(中国地図出版社編制出版発行、一九九七年四月第一版天津第一次印刷)を頼りにタクシーに乗った。ところが、タクシーの運転手さんは「周恩来記念館だったら、現在は水上公園のとなりに移転してしまっている筈だがなあ」という。しかし、「ともかく、この地図に記されている周恩来記念館へ行ってくれ」と頼んだのである。

地図に示されている周恩来記念館の場所

に着いてみると、やはり閉ざされた鉄門の左側の門柱に「南開学校旧址」という金属製の看板が、そして鉄門の上には「天津市南開中学」という横長の大きな看板が掲げられていた。右手の潜り門が開いていたので、そこから入って右の守衛室に声をかけ「日本から来た者であり、館内を見学させて欲しいのですが」と頼んだのだが、「すでに新しい記念館の方に、ほとんどのものは移してしまっているので、日本から来た人だからといって特別に認めるわけにはいきません」という返事であった。そこで、館内を見ることは諦めて、館外の見学と写真撮影をしたということで、門内に入ることは認められてもなかった。

門を入った向かい側の建物は、比較的新しいので、南開中学のために建てられたものようであるが、右手の方にある古い建物、上の方に右から書きで「天津南開学校」という浮き彫りがしてあった。そして、その建物の正面にも門があり、完全に閉ざされていたが、これが南開学校時代の正門であったものようである。外側へ廻って見てみると、門柱に「天津市文物保護単位 周恩来同志 在津讀書及革命活動旧址

天津市人民政府 一九八二年七月九日公布」という看板があった。

再びタクシーを拾って、新しい記念館へ行ったところ、水上公園の北側の広大な敷地に「周恩来鄧穎超記念館」があったが、地図によると烈士陵园や展覧館の有ったところのようである。周恩来の生誕一〇〇周年を機会に新築移転したものと思われ、正門を入った右手（西側）はまだ土木工事をしていた。記念館は西向きに建てられており、正面玄関の上には横長に大きく「周恩来鄧穎超記念館」という金色の浮き彫りがなされ、石段の下には江沢民主席の筆跡による「為中華之崛起」という横長の大きな記念碑があり、右手には周恩来が使用したという専用機があった。

玄関を入った右手の受付に二人の小姐が居ったので、矢吹氏に依頼された『周恩来』の寄贈を申し入れたところ、電話を掛けて若干年配の資料係の小姐を呼び出したが、その人も何か相談をした後に電話をしていると思ったら、李孔椿館長が出て来た。挨拶をして名刺を交換した後、白鋼氏の通訳によって事情を説明してもらい、矢吹氏に依頼されてきたものなので確かに受領し

た旨の一筆を頂きたいこと、そして帰りに寄る旨を伝えた。

一階の展示室は、入口に記念品売場があり、周恩来が生前に着用していたものや使用していたところの、衣服や下着からテーブルコーダーにいたる各種の遺品が並べられていた。二階の展示室には外国の賓客からの贈答品が展示されており、三階に上がった右手には周恩来の部屋があり、左手には鄧穎超の部屋があったが、その周恩来の部屋へ一歩入ったときには吃驚してしまった。部屋の一番奥には、なんと周恩来が腰掛けて居るではないか。近寄ってみると、等身大の塑像ではあるものの、小生が少し移動してみても目はじつとこちらを見つめて居るし、手の甲の血管も実物のように精巧に作られているではないか。となりの部屋に坐って居た鄧穎超もそうであった。周恩来の部屋を出て左手の奥まったところには、周恩来に關係のある本や葉などが売られていた。

玄関の受付でお会いした資料係の人は、二階の「外国賓客からの贈答品展示室」入口に居ったが、われわれの館内見学中に『周恩来』の寄贈受領書を持ってきてくれた。

しかし、何を勘違いしたのか小生宛に
なっていたので、矢吹氏宛に書き直して
もらった。

それは「矢吹晋先生： 捐贈的《周恩来
十九歳の東京日記》一書已被周鄧記念館
圖書資料室收藏。我們非常感謝 对我館工
作大力支持。 周恩来鄧穎超記念館印二〇
〇〇年九月十日」というものであった。

ところで、南開大学へ行ったときには、南
門の正面に周恩来の大きな石像が南面して
立っているのを眺めながら、一三年前には
北京大学の西門（紅門）に西面して立って
いた毛沢東の大きな石像が今回は撤去され
しまつて居ったことを思い出しつつ、また
今回の「周恩来記念館から周恩来鄧穎超記
念館へ」の大規模な新築移転を知り、周恩
来記念館の有った南開学校旧址や周恩来鄧
穎超記念館などの見学をしつつ、一三年間
の時間の推移と中国情勢の転変を考えさせ
られた。

中国の改革開放政策は、周恩来が早くか
ら何度も唱えていた「四つの現代化」政策
の延長線上にあるものであり、周恩来や毛
沢東などの死後に復活した総設計師たる鄧
小平によって全開したものであることを、

中国の人たちは良く知っているように思わ
れる。「社会主義市場経済」ということは形
容矛盾をなす言葉ではあるものの、言葉は
ともかくとして実態が大事である。「黒猫で
も白猫でも鼠を取る猫が良い猫だ」という
かの鄧小平失脚の原因ともなった言葉は名
言である。現在の中国は、「現代化」近代
化)の推進によって一三年前とは様相が一
変してしまい、高層ビルの林立や車の洪水
などには吃驚したが、しかし感心したこと
にはLNG(液化天然ガス)を使用する車が
環境に優しいということで、政府によって
奨励されていることである。

現在の中国では、「環境保全」ということ
を第一義的に考えており、飯店における
シート・枕カバー・石鹸・歯ブラシなど、日
本では考えられないような扱いをしている
ことを知り、日本でも学ぶべきであると痛
感したのである。日本では、ずいぶん無駄
と思われることを平気でしており、環境破
壊の原因となっていることが多い。もし、
日本の人口の一〇倍もある中国人が日本人
と同じような行動様式をとったとしたら、
環境破壊による地球破滅・人類絶滅は近い
将来となつてしまふことである。たとえ

若干の不便は感じて、環境保全を第一に
考えるべきであろう。日本よりも経済的に
は「遅れている」中国が、実はそうした面
では日本よりも「進んでいる」と痛感した
今回の中国滞在であった。日本は、そうし
た面では「中国に学ぶ」べきである。

今年度のソフイー賞(国際環境賞、「ノー
ベル環境賞」とも言われ九八年に設立、毎
年一人にたいして賞金一〇万ドルが与えら
れる)の受賞者は、北京地球村環境文化セ
ンター主任の廖曉義女史であったという
(『北京周報』日本語版、二〇〇〇年第三三
号、八月一五日発行)。

日本は、経済大国として羨望されてはい
るものの、エコノミック・アニマルなどと
軽蔑されてもいる。そこで、そうした「環
境保全」といった方面でのノウハウや技術
面において大いに貢献することにより、「環
境保全大国」として尊敬されるべき存在とな
るように、努力しなければならぬのである
。日本人は、今こそ意識変革をすべき秋
である。中国では、物質文明のみならず「精
神文明の建設」を強調するようになって既
に久しいのである。

(二〇〇〇年一〇月一五日日記)

逆耳順耳

矢吹 晋

北京日記2000年8月(上)

二〇〇〇年八月一日(木)

成田一三時五十分。エア・チャイナは五分遅れて一六時半離陸。三時間飛んで一九時半北京着。劉志明氏(中国社会科学院新聞研究所)の出迎えてシンポジウム会場のメディア實館に一九時半着。二〇時すぎから王維明(中国社会経済文化交流協合理事、国際部主任)と劉志明氏らの招宴。高井潔司・藤村幸雄・矢吹・村田忠禧が客。

八月一日(金)

三時半、シンポジウム打ち合わせと液晶プロジェクトのテスト。

夜、『読売新聞』三人組(藤野・杉山・石井)が高井・矢吹・村田を東四「孔乙己」に招待してくれ、A女史とX夫人も加わる。

八月二日(土)

九時一〇分前、会場へ。羅涵先(全国人民政治協商会議常務委員会、中国社会経済文

化交流協会会長)の開幕詞、劉徳有(文化部原副部長)の「中日文化交流と相互理解」について小生が「世論・伝播・相互理解」をパワーポイントで説明(二五分程度の発言か)。

高井潔司報告「日中間のコミュニケーションギャップの拡大と報道の作用」、劉志明「中日相互世論的変遷」、坪井ゆずる「世論調査にみる日中意識の格差」、稲垣誠(北京遊樂園)「日本企業におけるコミュニケーション問題」、盧徳平(中国青年政治学院)「中国現代文学中的日本形象」、石曉軍(姫路独協大学)「中日相互認識ギャップ京成の歴史的原因」、関世傑(北京大学)「中日跨文化人際交流中文化要素上の差異」など。午後、加藤剛(国際交流基金)「日中文化交流の現状」、徐一平(北京日本語研究中心)「中国的日語教育」、米田正人(国語研究所)「日中言語観比較」、村田忠禧「日中漢字使用状況比較研究」。(ここで渡辺浩平メーメル紹介、上海大学生のサブカルチャーなど)、六〜八時、五糧液で祝杯。「人喝酒、酒喝人」。

八月三日(日)

八時五〇分、会場へ。劉志明氏に『朱鎔基』を進呈、署名を求められる。中央電視台の王祿氏は抗日戦争の映画を使って日本

イメージを説明。

隣席の羅老が「日本軍と接触したが、あんなにひどくはなかった」「日中両国は連邦制をやれば、問題解決」などと大胆なことを口走るの老人の特権か。農業専門というが、経歴を調べてみたい。また映画「阿信(おしん)」、「追捕」君よ憤怒の河を渡れ(おしん)における影響が大きいという周知の事柄もわざわざ教えてくれた。

午後は少し長たらしい中国側報告が続いた。最後のインターネット論は新情報を含むが、中国メディアの産業化論などは、危機意識薄弱ではないか。それらを忍耐強く聞いた後、総括討論。

藤村、矢吹、高井、劉志明などが発言。孫東民氏の大演説に藤村氏反論。矢吹が張放、黃升民報告へのコメント。「日本マスコミの課題は権力との癒着よりは、コマーシャルズム過多の問題ではないか」。

高井氏が元特派員として報道への現場からのコメント。これに孫東民氏が部分反論。そこで時間切れ。矢吹が一分間の挨拶。張永年氏閉幕挨拶。六時記念撮影ですべて終わり。

八月二日(月)

一〇時半ロビーで村田氏を待ち、タクシーで師範大学留学生楼へ(二〇一室電話

六二二〇・××××)。昼 電話カード二〇元を買い、農貿市場を見学し、搾菜肉糸湯をすすり、餃子一つ。冷や汗が出たのは風邪か。『中国青年報』(二〇〇〇年八月四日)がシンボジウムの一端を報道してくれた。『著名な国際問題専門家矢吹晋は日本メディアの中国報道に歪曲された成分が含まれると認めた』。然り。矢吹は『人民日報』もまた「歪曲された成分」を含むのではないかと指摘したが、この部分はカット。まあ、「家庭の事情」ならいたしかたなし。

八月一五日(火)

一〇時、原由美子氏らと中央電視台王祿氏(研究室主任・高級編輯)を訪問し、中国テレビ事情をヒアリング。村田氏とゲスト招待レストランで火鍋料理。のち、図書館へ。『孫治方全集』など八種を買った。

八月一六日(水)

二時東門で待合せ、T S氏訪問。その後、劉志仁氏が現れ、「双盛園」(東方宮寓大廈、朝陽区関東店大街二八号)で海鮮料理を食べながら、金州白酒を飲む。

八月十七日(木)

夕方五時半、中国大飯店へ行き、K T氏と五糧液を痛飲。

八月十八日(金)

九時、党史研究室李海文さんの出迎えて、

党史研究室へ。一〇二二時、石仲泉氏(党史研究室副主任)の司会で報告座談会。

金秋助教授のCultural Power 書評のこと、楊炳章、鄧小平政治的伝記の矢吹書評を紹介し村田忠禧さんにバトンタッチ。

その後、中国経済についての質問にいく

つが答えて、パワーポイントを示しながら「WTO以後の中国経済」についての私見を披露。大きな来賓用食堂で会食。のち、北京大学へ。

八月一九日(土)

一時半、村田氏と「職工食堂」で昼飯。大学生協そのものの混雑ぶりだが、安い。

「一〇元分食つのは不可能」なほどの安さの由。ひじきの煮物、魚の煮物、野菜の油炒めと白飯。いずれも半分ほど食べてギブアップ。村田氏の胃袋は健啖でべかり。

老人は、この油にはやはりついていけない。

食後、稲香園(食品集団公司)をぶらぶら。天津の花林糖や南京板鴨など伝統名産の名店街。酸乳をストローですすり、酥菓子を半斤食べる。

三時半バスで燕沙商城へ。地下一階の韓国料理でH T氏と会食。中国市場開発に生きる銀行マン四七歳。青島を飲み、カルピ

焼き、お好み焼きを頬張り、最後は冷麵ト

コタ天津の苦戦の話を。

売れないシャレードの滞貨、営業は天津側がトヨタにやらせない。「ここまでいびるかの感あり」という。WTO以後、みずから営業し、よい車を生産する体制ができるまで見通しは暗い。日本メーカーで残るのは、トヨタと本田のみか。

東莞県に台湾の教科書を使う学校あり。中央の方針にすべてさかへうことを売物にして。北京から上海への人員移動が目立つ。上海ならより自由な商売ができる。

北京は箸のあげおろしまで介入するのでやりきれない。

「伊藤忠天壇公寓内にたむろする日本人コミュニティ」の奇妙な生態。これをさらにケンペンスキーマンションへ。八〇平米。一庁二房。すべてドイツ式。ドアマンは、ドイツ語なまりの中国語でタクシーを呼んでくれる。

食後、新世紀に電話をかけて三浦徹明教授(拓殖大学)と会う。一〇時すぎ、下着を洗濯し、髪を洗い、さばさば。かくて寮生活一週間が終わる。

八月二〇日(日)

六時半起床。九時、タクシーで天安門広場歴史博物館へ。周氏の案内で敦煌展を見る。ウイグル語の仏典の意味を三浦徹明氏と語る。のちタクシーで中関村へ。C D

Rは、二五元(燕沙)、一〇元(入り口)、五
六元(一番安い店)と三つの価格、品質は
全く同一。すなわち一物三価なり。
八月二日(月)

交通銀行で五万両替(三七〇四元、牌価七
四八三・一四九、ちなみに八月四日は七
四二八・八)は、ひどく時間がかった。の
ち民航で大連行きの切符を買った。五七〇元
×二(往復)で一四〇〇元。軍事書店で二
八元買った。急いで帰宅。

六時KH氏とともに華泰燒鷄仔酒樓で劉
陽酒(五糧液系列)で広東料理を食う。サー
ビス小姐が美人で気持ちよい。店の雰囲気
も完全な香港風。「老板は香港人か」と聞くと、「広東人」の由。

八月二日(火)

昼は三環路の西安料理「泡」。二つの
ホットケーキ状饅頭を指でちぎり、その碗
に番号札を付けて煮てもらった。西安流ス
イートン。健啖家村田氏はほぼ平らげたが私は
一枚相当分だけでダウン。

雨が降ってきたのでタクシードで帰り、二
三時昼寝。このところ昼寝ばかりしてい
る感じ。三、四時メモを書いて、資料を整
理。四時半、歯医者からもらった抗生物質
を飲む。シャワーを浴びて洗濯。七時、聯
播節目」をみながら、ひと眠り。

八月三日(水)

六時起床。八時東門、映画館へ。バスで
積水潭まで、地下鉄復興門で乗り換え、西
単下車。首都電影院(西城区西長安街四六
号)。以下は、「毎日新聞」の紹介するこの
映画。汚職相次ぐ国内で「生死をかけた選
択」がヒット。

「共產党、政府幹部の汚職事件が相次ぐ
国内で、市長の反腐敗闘争を描いた映画
「生死をかけた選択」がヒットしている。党
中央は反腐敗キャンペーンの一貫として党
員に組織的な観賞活動を指示し、マスコミ
も大々的な宣伝を繰り広げているが、腐敗
の深刻さ「深刻さの程度」というよりは
「構造汚職」が核心」を裏付けていると言え
そうだ。映画は勇敢な市長「高倉健そっくり
の」のがみばしった男「李健常」が元上司
「現省委員会副書記であることが重要」や
自分の妻が関与する国有企業を舞台にした
汚職事件を暴き、腐敗を一掃するという筋
書き。六月下旬から各地で上映され、ここ
数年で最高の二五〇〇〇元(約三億二〇〇
〇万円)の売り上げを記録している。

一九日付党機関紙「人民日報」は党中央
の「通知」を一面に掲載し、「映画は反腐敗
と政治浄化の効果をもたらす文芸作品だ」と
高く評価。さらに「党員は観賞・討論す

る。党文化部門は積極的に宣伝・上映する
マスコミは映画評を宣伝する。ことを
求めている。広東省では省トップの李長
春・党委書記が「党幹部の夫婦同伴観賞」を
呼びかけたほか、北京市でも賈慶林・党委
書記ら幹部がそろって試写会に出席した。

国内で昨年一年間に摘発された汚職事件
は約三万八〇〇〇件(前年比九・四%増)
今年七月末には全国人民代表大会(全人代
「国会)の成克傑・常務副委員長が収賄罪
で死刑判決を受けた。

瑠璃廠で四川料理の八宝粥で一息、茶店
でウーロン茶二〇元。のち新僑飯店サウ
ナでアカスリ、中医マツサージ八八〇元。
のち、崇文門から朝陽門へ地下鉄。歩いて
北京宮へ。大使館W氏らと会食。

八月二日(木)

六時すぎ起床。一〇時半、師範大学外事
弁公室のW教授(法律与政治研究所)、L副
教授(国際関係与国際法)と会って挨拶。F
氏から電話あり。『毛毛の解説』を書くこと
を承知。来春刊行の由。

午後三時中央文献研究室を訪問し、金冲
及教授と会う。夜、劉志仁氏と会食(常州賓
館にて)。

八月二日(金)

八時二〇分出発の予定だが、タクシード

かまらず。ようやくつかまえたタクシーはガソリン切れ。語言学院前で別のタクシーを探す。成府路の渋滞。九時二〇分中央党校着、一二時まで意見交換。昼飯をくい、二時タクシーをつかまえる。三時前師範大学で荷物を取り、和平賓館へ。六時〜八時、シンボジウム夕食会。

八月二六日(土)

シンボジウム第一日。六時すぎ起床。八時二〇分前、食堂に行くと、大河原大使が声をかけてくれ、「中国の日本観」などを語り合う。九時開会。劉徳有氏と谷野大使あいさつ。写真撮影。ついで劉徳有氏と大河原大使の基調講演。太田博(タイ大使)、呉学文、田久保、高寛成、一二時五分、昼飯。林暁光、徐一平、大使館小姐など。村田氏から胡長清事件のVCDROMのコピーをもらう。サイレントで少し見る。

村田さんが見せてくれた本、馮育軍著『正在走向軍事大国的日本』(軍事科学出版社、軍内発行、二三八ページ、二〇〇〇年一月)をめくる。著者は「日本へ行ったこと」がなく、「日本問題の研究者」でもない。目的は「懐着憂患意識、旨在警示今人」。『閩戦経』は日本初の兵学。ついで『武教小学』、『士道』、『土談』、『武道初心集』にみられる武士道。『国防の本義及び其の提唱』に「戦争は

創造の父、文化の母」。全二五章、二二章「中国元首訪日」、二二章「東史朗事件」、二三章「友好か、戦争か」、二四章「帰帰亜洲」、二五章「東京之不祥之兆」。本書は、全編これコジツケと猜疑心で凝り固まる。ああ、驚くべし、日中間係はここまで悪化した。

八月二七日(日)

シンボジウム第二日。午前、賈教授北京大学)とともに共同司会、田中直毅報告に一言コメントし、蔣立峰氏が「サビオ」の台湾生命線論に言及したとき、その雑誌の世論への影響力を見てから論じよと叱る。昼、王府飯店の越秀飯店で谷野大使招待午餐会。大使が一時間しゃべる。二時一〇分前に会議室に戻る。賈教授が『朱鎔基』に言及して紹介。各報告後、簡単な質疑応答。ついで田中直毅氏の総括。人民元の変動相場制論に驚いた。李登輝訪日はガバナンスからして当然。台湾ビジネススマンは東京で北京での対話がなかった。

大陸を知らないとい述べる。といい、いい、適切な総括であろうか。疑わしい。五時半、バスで大使館へ。燕沙を東へ。中日友好賓館の対面あたりに公邸あり。事務局、通訳氏などと食べる。八時半ホテル着。メールをチェックし、荷物を整理し、一―時すぎ寝る。

アジア経済研究所 丸川知雄編 中国産業ハンドブック

二〇〇一―二〇〇二年版

二月刊

A5判三五―頁定価三〇〇〇+税
中国産業動向をガイドする。二〇業種の基本動態、主要企業、重要年表、情報源、重要指標。執筆者はアジア経済研究所研究プロジェクト参加の第一線専門家。WTO加盟によって大変動を遂げる中国経済をウオッチするための必携書。

三菱総合研究所編 中国進出企業一覽

二〇〇一―二〇〇二年版

二月刊

B5判一三〇〇頁 定価一万五千円+税
中国に展開する日系企業のビジネス拠点データブック。第十四版目で、旧版を大改訂。アンケート調査によってデータを精選し、会社別の各種在中ビジネス拠点を一覽する。中国ビジネスオフェイス必携書。